
広報ビデオ制作の実践研究

—大学と地域との連携事例から—

析 窪 優 二

2013年～2014年にかけて、社会福祉法人・日本介助犬協会の広報ビデオ（約11分）と豊田市旭地区の広報PRビデオ（6分）を大学ゼミの実践研究モデルとして制作した。いずれも関係団体からの依頼で制作したもので、大学ゼミが本格的な広報ビデオを地域連携・社会貢献としてボランティアで制作するのは珍しいことである。作品の制作スタイルは、著者（教員）がプロデューサーとなって撮影台本を作成し、ゼミ学生が撮影や編集、仕上げに参加する形で取り組んだ。そして完成作品の内容や構成、その制作過程を分析した結果、広報ビデオの制作では撮影台本の完成度が極めて重要な意味を持つことを改めて確認できた。ドキュメンタリー制作とは違った部分で学生教育に優れた効果があることも浮き彫りになった。

1. はじめに

映像コンテンツを使った広報活動は、テレビやインターネットなどが普及するなか、企業や行政・各種団体などで広く活用されている。こうしたなか2013年12月に、社会福祉法人・日本介助犬協会の広報ビデオを相山女学園大学析窪研究室（文化情報学部メディア情報学科）が制作した。大学が地域と連携して社会貢献すると共に、学生教育の一環としてボランティアで制作したものである。こうした全国展開する団体の公式ビデオを、名古屋にある大学・研究室が地域連携の形で制作した例は全国的にも珍しいことである。また2014年6月には豊田市旭地区の広報PRビデオも制作した。これは地域の観光スポットや自然、温泉、グルメなどを紹介するプロモーションビデオである。そこで本稿では広報ビデオの制作過程やプロデュースの視点を、介助犬ビデオを中心に旭地区ビデオの事例を含めて分析・報告した上で、映像コンテンツの制作で重要なことや優れた作品

を制作するための課題、学生への教育効果などを考察した。

2. 介助犬・広報ビデオ制作の経緯

社会福祉法人・日本介助犬協会は、手や足に障がいのある人を手助けする介助犬の育成と普及に取り組んでいる。2009年に愛知・長久手市に介助犬総合訓練センター「シンシアの丘」を開設し、国内では最も多い育成実績を持っている。相山女学園大学析窪研究室は、2010年度にドキュメンタリー「介助犬の育つまで」（17分30秒）を制作、2011年には映像作品「介助犬フェスタ2011」（4分10秒）を制作、ともに大学・学部サイト¹⁾で動画公開し、完成作品を介助犬協会に寄贈している。

こうしたなか2013年9月に、日本介助犬協会から広報ビデオの制作依頼を受けた。具体的には、

- ①作品の長さは10分～15分
- ②介助犬の使用希望者への説明会などで使うほか、寄付をしてくれる団体やボランティアな

どに介助犬協会の活動や協会の施設を知って
もらいたい

③できれば同年12月ころまでに作品を完成し
てほしい、という内容だった。

映像作品にはドキュメンタリーや社会情報番組、CMなど様々なジャンルがある。今回の広報ビデオは、映像制作業界ではビデオパッケージ・VPと呼ばれるジャンルで、制作会社ではテレビ番組、CMと並ぶ、大きな収入源になっている。こうした広報ビデオは、ドキュメンタリーなどと映像制作という点では同じだが、コンテンツの性格は大きく異なる。ドキュメンタリーは制作者が第三者の客観的な視点で外部から取材・撮影して作品を作り上げるが、広報ビデオは企業や団体がみずから映像でメッセージを発信するものである。ということは、ドキュメンタリーは取材過程で様々な制約があつて必要なシーンが撮影できないこともあるが、広報ビデオはそうした不確定要素は少なく、クオリティの高い優れた映像作品を制作することが求められる。制作会社等にとっては企画力・構成力はもとより、撮影、編集・仕上げに至る制作能力の全てが問われるものである。そうした作品を、専門の映像制作会社ではない大学の研究室が制作できるのか、仮に制作する能力はあつても、制作に費やす時間はあるか、ということが制作を引き受ける場合の検討課題となった。しかしながら大学側としては、これまでの経緯もあり、協会に必要な映像は可能な範囲で制作協力したいと思っていた。そこで、これまでに撮影した映像を最大限に活用する形で撮影期間を短縮し、著者（桝窪）がプロデューサー兼ディレクターとして制作の中心になり、学生が部分的に参加する形で、今回の広報ビデオの制作依頼を引き受けることに決めた。

3. 企画・撮影台本の作成

広報ビデオの制作は、①企画、②構成案・撮影台本の作成、③現地での撮影、④映像編集、⑤ナレーション・音楽・字幕スーパーなどの仕上げ、⑥完成作品の確認・修正、といった流れで進められる。研究室ゼミは3年生の卒業研究がスタートし、すでに学生の課題作品が決まっていたので、この広報ビデオは著者（桝窪）が制作全般を担当し、学生がナレーション、音声・編集、音響効果・選曲を担当することにした。教育効果という点では学生主体で制作する形が望ましいが、過去に撮影した映像素材を使用することや、求められるクオリティの高さ、作品の納期などを総合的に判断して決めた。2013年9月に制作依頼を受け、最初に協会から企画の素案となる下記の「映像イメージ」が提示された。

【日本介助犬協会の「映像イメージ」】

○日本介助犬協会の歴史

○日本介助犬協会の理念

- ・良質な介助犬の育成、・人材養成
- ・相談及び情報提供、・啓発、・研究

○介助犬総合訓練センター 施設紹介

ホール、事務室、相談室、ボランティア室
犬舎/作業室、トレーニング室/テラス/ドッグラン、医務室/犬用多目的室研修生室、訓練室/ダイニング

○合同訓練の様子紹介

介助犬総合訓練センター内での訓練の様子
公共交通機関やスーパー等での訓練の様子

○使用者さんのコメント（2名）

○その他の活動紹介

（多くのボランティアさんに支えられて……）

広報活動 講演&デモ/募金活動/

募金箱設置/(パピー)/(繁殖)

この映像イメージをもとに、プロデューサー兼ディレクターを務める著者が仮構成案を書いて、それを協会側に確認・修正依頼し、その2週間後に撮影台本を完成させた。作成した構成案(概要)は下記の通りである。大学側からの提案は、①作品の長さはできるだけ短い方が良いので10~11分程度をメドに構成したい、②作品の最後に協会代表者が視聴者に語り掛けるシーンを設定した方が良い、という2点であった。協会側の同意が得られたので、この構成案に沿って、ナレーション原稿を書いて、撮影台本を作成した。

【介助犬・広報ビデオの構成案 (11分)】

○オープニング	1分
○介助犬とは～デモ映像で紹介～	50秒
○日本介助犬協会の紹介・理念	50秒
○「シンシアの丘」紹介	2分
○介助犬と使用者の合同訓練	2分
○介助犬使用者の紹介	2分
○協会のその他の活動	1分
○協会・事務局長のインタビュー	45秒
○エンディング	30秒

広報ビデオでは撮影台本は重要な役割を果たす。ドキュメンタリーでは、撮影した映像をもとに構成を検討して、そのあとナレーション台本を書いて作品を作り上げる。一方、広報ビデオは一般的に撮影台本がそのまま最終台本になり、作品全体の内容や表現方法を撮影台本が決めることが多い。このため撮影台本では協会側から提示された内容をわかりやすく紹介するよう、全体の流れやナレーション・コメントを決めると共に、過去に撮影した資料映像を効率的に活用できるように留意した。学生の課題作品には原則として現場リポートを入れるが、今回は全編ナレーションで対応するようにした。

この台本をもとに、現地でカメラ撮影する内容と撮影日程の調整に入った。訓練センターの外

観、基本訓練、介助作業の訓練、公共の場所での訓練、介助犬の広報活動、施設見学会、募金活動、ボランティア、人材育成などは過去に撮影した資料映像が使えることを確認した。今回、新たに撮影するのは施設紹介、合同訓練、介助犬使用者の紹介、事務局長インタビュー部分に決めた。

4. 撮影・編集・仕上げ

現地での撮影は10月上旬に1日で行うことにした。一般的には2日程度かけて撮影する内容であったが、大学側が忙しいこともあり、とりあえず1日で撮影し、必要な段階で追加撮影することにした。撮影は本来、専門のカメラマンに依頼するのが普通だが、今回は制作費をかけないことが前提なので、著者が私設の撮影助手1人を伴って撮影した。カメラはSONY業務用ハイビジョンカメラ・HXR-NX30Jと撮影用LED照明、必要に応じてワイアレスマイクを使用した。

広報ビデオの撮影は、ドキュメンタリーとは違い、撮影台本に従って必要なカットを撮影する形になる。今回の場合も事前に出演する関係者の承諾を得ているので、撮影自体はスムーズに進んだが、カメラアングルや構図、現場の臨場感を伝えるための音声収録などは、現場で取材者・カメラマンが適切に判断することが求められる。どちらかと言えばCMとドキュメンタリーの間のような撮影形式である。その後、施設紹介シーンだけ現場(訓練センターの室内)を綺麗に整理・整頓するので改めて撮影してほしい、という要望が寄せられたので追加撮影を行い、最終的にはカメラ撮影は2回で完了した。

撮影のあとは、大学スタジオで映像編集をした。編集はノンリニア編集EDIUS PRO5で台本に従って映像・音声をつなぎ合わせ、そのあと字幕スーパーを挿入した。そして撮影台本を微調整する形で、最終台本(ナレーション原稿)を作成し

た。ここまでの作業は撮影してから1週間程度で著者が行った。このあとナレーションと音楽を入れる作業から、選曲・音声編集を担当する学生Aとナレーター担当の学生Bが参加した。学生は2人とも柄窪ゼミの3年生で、卒業制作として名古屋港水族館と相山歴史文化館の作品を担当していた。その制作作業をしながら介助犬ビデオの制作に参加した。

映像制作会社等では、最後にナレーションを入れて作品を完成させるケースが多いが、大学では学生が作品イメージをしっかりとつかんで、仕上げ作業をするのが好ましいと考えて、原則として仮ナレーションを入れてシミュレーションしている。広報ビデオでも、まず仮ナレーションを収録し、それを音声編集して、映像とナレーションとのバランスやテンポを確認し、そのあと音楽の選曲を行った。今回の作品ではオリジナル音楽等は用意していないので、大学で契約している著作権フリーCDからイメージに合う音楽を選んだ。限られた音源の中からBG・音楽を選ぶのは難しいことで、担当の学生は選曲に6時間程度を要した。そのあと著者が選曲の部分的な修正や作品全体の微調整をして、仮完成版は11月中旬に完成した。仮完成版は、当初の企画意図に沿った一定のクオリティを確保できたと判断できたので、協会担当者に送付して内容の最終確認を依頼した。最終確認では、作品冒頭のタイトル字幕スーパーと映像カット1ヵ所を修正してほしいという要望が寄せられた以外、指摘等はない。そこで12月中旬、スタジオ・アナウンスブースで、本番ナレーションを収録、それを仮ナレーションと差し替えて、作品を完成させた。作品制作に要した時間（概算）と作業の担当者は下記の通りである。

- ・台本の作成/修正 4時間→ 教員が担当
- ・撮影 2日/6時間→ 教員が担当
- ・編集/字幕処理 8時間→ 教員が担当

- ・選曲 音声編集 6時間→ 学生Aが担当
- ・ナレーション収録 2時間
→ 学生Aと学生Bが担当
- ・仕上げ/最終確認 2時間
→ 教員と学生A・学生Bが担当



写真1 介助犬・広報ビデオ



写真2 介助犬・広報ビデオ



写真3 介助犬・広報ビデオ

5. 作品の評価

完成作品は当初の企画に沿った内容になり、映像制作会社の制作した作品と同じ程度のクオリティは維持できたと著者は受け止めている。なかでもナレーションは、学生とは思えない優れたナレーションだと思っている。作品を客観的に評価するために日本介助犬協会の担当者にアンケート調査を実施した。調査では、作品の構成、カメラ映像、音楽・音響効果、ナレーション、総合評価の5項目について、5は「良い」、4は「まあ良い」、3は「普通」、2は「あまり良くない」、1「良くない」という形で5段階評価を求めた。結果は表1の通りである。

表1 日本介助犬協会の評価

質問項目	評価
作品の構成は？	5
カメラ映像は？	4
音楽・音響効果は？	5
ナレーションは？	5
総合評価は？	5

完成制作についての感想や意見等（自由記述）は次の通りであった。

【介助犬協会の感想・意見】

- センター（シンシアの丘）のことや、取り組み、合同訓練等を簡潔に紹介する映像はこれまでありませんでしたので、大変有難く、早速使用させていただいております。今後も活用させていただきたいですし、時が経ったらまた新しいものを作成していただけると大変嬉しく思います。
- 構成等とてもわかりやすく、見やすかったです、すてきな映像をありがとうございました

た！

- フェスタ・デモ映像の際に作業名（「冷蔵庫から飲み物を取ってくる」、「落としたものを拾う」など）の字幕が入るとより介助犬がどのような作業をするか伝わりやすいと感じました。
- ナレーションの声が大変聴きやすく感動しました。
- 長期間の映像記録があるからこそそのボリュームある内容になっており、協会として伝えたいことがわかりやすくまとまっていて全体を通して見やすかったです。今後も機会があるごとに映像をお撮りいただけるとありがたいです。

完成した広報ビデオは、2013年12月の介助犬使用者向け説明会から活用されたほか、椋山女学園大学YouTubeサイト²⁾で動画公開している。今回の映像制作は大学ゼミが地域連携・社会貢献として教員・学生がボランティアで取り組んだものなので、映像制作費用は一切かかっていない。

6. 豊田市旭地区の広報ビデオの制作

日本介助犬協会の広報ビデオを制作したあと、2014年4月に豊田市旭地区（旧旭町）の広報PRビデオの制作依頼があり、学生と一緒に長さ6分のプロモーションビデオを制作した。この事例について簡単に報告する。制作を依頼してきたのは、地元の旭観光協会と豊田市役所旭支所で、秋に開催されるイベントに向けて、旭の観光スポットや自然、温泉、グルメなどをインターネット動画で広くPRしたいという希望であった。これまで豊田市旭地区と研究室との接点はなかったが、先方が映像制作に取り組んでいる東海地区の大学を調べ、最も制作実績のある著者の研究室に依頼してきたものだった。教員としては、せっかく依

頼を受けたので、できれば作品を制作したいと思ったが、ゼミ学生が就職活動で忙しい時期なので迷った。しかし先方の担当者の熱意に押されて、こちらから「現場撮影は1日だけ」という条件をつけて、旭地区との連携プロジェクトをスタートさせた。介助犬ビデオの制作事例を参考に、4月中旬から地元の担当者と作品内容をメール等で打合せして、大学側で撮影台本を作成した。そして5月までに大学で2回の打合せをして、撮影日を6月の第2土曜日、予備日を翌週の土曜日に決めた。

撮影に参加したのは4年生のゼミ学生6人で、前年度に東山動植物園シリーズを制作したメンバーが中心になった。作品タイトルは「自然・食・湯遊の山里～豊田市旭地区」、学生2人がリポーターを担当し、女子大生らしい視点で、旭の魅力を伝えるPRビデオにした。現地はどきどき小雨がふる天気でしたが、地元関係者の協力で撮影はスムーズに進み、予定していた全項目の撮影を、予定時間より若干早く完了させた。ゼミ学生は初めて現地を訪問し、豊かな自然や観光スポット、美味しい食べ物に出会って、とても楽しい雰囲気取材することができた。とても生き生きとした表情でレポートしていた。

撮影のあと、すぐにスタジオで映像編集、音声、字幕スーパー処理をして、6月末に作品は完成しインターネットで公開²⁾した。作品は地元関係者から大変好評で、7月中旬に豊田市役所に太田稔彦市長を訪ね、作品完成を報告した上で、桺窪ゼミから作品（DVD版）を豊田市に寄贈した。長さが6分という短い作品なので、介助犬ビデオの制作ノウハウを生かして、とても良い形で、地域連携による広報ビデオを制作できた。



写真4 旭地区・広報ビデオ

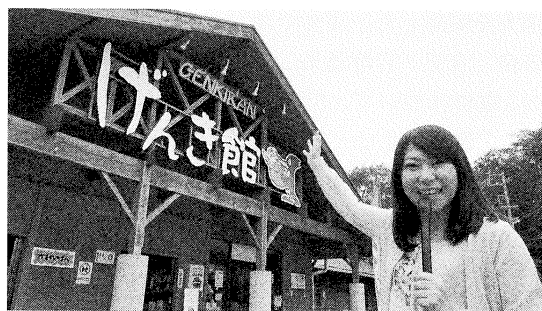


写真5 旭地区・広報ビデオ



写真6 豊田市長への作品寄贈

7. 広報ビデオ制作で重要なこと

介助犬ビデオは、全国展開している社会福祉法人の公式ビデオという、大学側にとって初めての本格的な広報ビデオ制作だったが、アンケート調査では一定の評価が得られ、制作者としても満足

できる作品を制作したと受け止めている。また豊田市旭地区・広報PRビデオも短期集中的に制作したものだが、女子大生らしい視点が盛り込めた優れた作品になったと思う。そこで今回のビデオ制作過程を分析しながら、優れた映像コンテンツを制作するために求められる課題を考察した。

優れた映像コンテンツを制作するには、企画、構成、台本、撮影、映像編集、字幕スーパー、音響効果・音声、ナレーション、仕上げなど、全ての作業工程を完璧に行うことが求められる。このうち広報ビデオなどの制作では、企画はクライアントから提示されるので、それ以降の作業を制作サイドがクライアントと相談して具体的に進めることになる。こうした制作工程で最も重要なのは台本である。介助犬の場合は、過去に行った映像制作がきっかけで大学に制作依頼がきて、大学側が過去に撮影した資料映像を有効活用する形で構成を検討した。過去の資料映像を使用する構成にしたことで、短期間の制作では難しい「輝く映像」を数多く使用することができた。またこうした構成にすることで現地での撮影時間を大幅に短縮できた。もし全てのシーンを新たに撮影するとすれば、最大5日程度の現地ロケが必要になって大学側の時間確保が難しくなり、結果的に作品制作を引き受けられなかったと考えられる。そうした意味では、介助犬ビデオでは過去に撮影した資料映像を有効活用する構成で台本を作成したことが、作品制作を成功させた大きな支えになっている。

また豊田市旭地区の広報ビデオでは、大学側の都合で現地撮影を1日で行うことを前提に作業を進めた。このため必要な映像を短時間に的確に撮影することが求められたが、完成度の高い撮影台本を準備したことで、円滑に撮影することができた。優れた広報ビデオを制作する大きな原動力になっている。

こうした撮影期間など制作サイドの都合とは切り離しても、映像作品の構成という視点で台本の

重要性は高いと考えられる。広報ビデオとドキュメンタリーでは、台本の性格や意味、作成過程は異なるが、いずれも台本は制作過程で修正・加筆されるのが一般的である。最初は撮影台本であるが、撮影を終了して映像編集をする段階では編集台本になる。そしてナレーションを入れる段階ではナレーション台本になり、完成した段階で変更部分をすべて修正して完成台本になる。ドキュメンタリーでは動いている社会的テーマを扱う場合もあり、もともと撮影台本がないことも多い。そういう作品では、ある程度、取材・撮影が進んでから、撮影済みの映像を確認しながら構成案を検討して、編集台本を作成して作業を進める。したがって撮影台本の果たす役割はそれほど大きくはない。しかし今回のような広報ビデオは、撮影台本から具体的な制作作業が始まり、編集台本、ナレーション台本、完成台本と作業工程が進んでも、台本の内容が大きく変化することは少ない。今回の介助犬ビデオでは、撮影台本の介助犬使用者部分のナレーションを2行ほど修正しただけでそのまま編集台本になり、それがそのままナレーション台本・完成台本になった。豊田市旭地区の広報PRビデオでも、撮影前に確定していなかった部分を少し修正しただけで完成台本になった。広報ビデオは、伝えたいメッセージやその内容を企画段階で設定して、それを映像で表現するので、取材過程で構成や内容を検討するドキュメンタリーとは本質的に違う。制作者はこうした作品制作の性格の違い、制作過程の相違点をしっかりと認識することが求められる。今回は作品2本とも、短期間に優れた内容のものを作り上げたことから、広報ビデオ制作における撮影台本の重要性が改めて浮き彫りになり、そうしたことを制作実践研究で実証することができた。

ただし編集段階での構成や台本は、広報ビデオとドキュメンタリーでは基本的に大きな違いはないと考えられる。構成の留意点としては、作品全体が単調にならないように変化をつけること。ナ

レーションやインタビューのシーンを長々と設定しないことなどが必要である。例えば、ナレーションを入れたら、現場の音だけにして、そのあとにインタビューを入れて、またナレーションを入れて、つぎに音楽（BG）だけで映像を見せる、などといった作品の流れに変化をつけた構成が求められる。介助犬ビデオで構成上、最も気をつけた部分は介助犬使用者と合同訓練のシーンだった。インタビューを長く使いたい部分でも、途中でナレーションを挿入してインタビュー部分を2回に分けることで、1回のインタビュー時間を短くしてテンポを保った。また映像にナレーションを入れなくて現場のノイズだけにして現場のリアリティを出すシーンを設定するなど、常に変化をつけることを念頭に構成した。プロの映像制作者のなかにはドキュメンタリーを専門にしながら、こうした広報ビデオの制作を手がけている人も多い。こうしたことから、このような構成上の留意点は映像制作の基本として大切なポイントである。

今回の制作は、大学・研究室での制作事例なので、台本はプロデューサー兼ディレクターの著者（教員）が書いたが、台本は一般的にはディレクターのほか、専門の構成作家が書くケースがある。このことから台本を書くことは極めて専門性の高いプロセスだということが伺える。構成作家が台本を書くケースでは、ディレクターとは違う第三者が書くことで客観性がある内容が期待でき、総合的に見ると優れた作品を制作できるメリットがある。ただしその台本をもとに現地でカメラマンに指示を出して撮影ロケをして、映像を編集するのはディレクターなので、それぞれの作業工程に対応した構成力や判断力など総合的な力が求められる。

今回の介助犬ビデオや旭地区ビデオは大学・研究室ゼミで初めて制作した本格的な広報ビデオだったが、ゼミにはテレビ現場や映像制作の仕事をめざす学生もいるので、実戦的な教育効果が期

待できる研究課題になった。こうした作品は優れた制作能力が求められるので、一般には学生だけでは対応できない。しかし教員が中心となって制作を進めて、ナレーションや音響効果などを学生が担当する共同制作の枠組みで、優れた作品を制作できることが確認できた。なかでもナレーションは、最終的にはプロレベルに近いナレーションを入れられたので、担当の学生には貴重な経験になったと考えている。テレビの制作現場では、入社1年目の新人ディレクターはアシスタント（AD）として制作に向き合うのが普通である。したがって今回の制作事例は、学生に対してテレビの制作現場をある程度イメージできるような実践教育モデルを示した形にもなっている。

また豊田市旭地区の広報ビデオでは、地元の観光協会の人たちと打合せや現地取材をするという共同作業を通して、学生は学内では学べない様々な体験をした。学生の教育という点では、映像制作という枠組みを超えた、「質の高い」教育の場となったと受け止めている。

こうした広報ビデオ制作は、制作者や一般の人が優れた作品だと感じることも大切だが、発注者・依頼者であるクライアントが作品を高く評価して、完成作品に納得することも重要になる。このためには、制作者は企画段階からクライアントと連絡を密にして、撮影台本の確認・修正、仮完成版・映像のチェック、完成作品の最終確認など、制作者と発注者が緊密にコミュニケーションを取りながら作業を進めることが求められる。今回の制作でも、そうした一般的な制作工程に沿って作業を進めていて、映像プロデュースという側面でも学生教育に活用できる実践研究プロジェクトになった。こうした実践研究を通して浮き彫りになった、広報ビデオとドキュメンタリーの制作過程における重要性の違いとその教育効果を比較して、それを表2にまとめた。◎は「重要」、○は「やや重要」、△は「それほど重要ではない」、×は「重要ではない」を意味する。

表2 広報ビデオとドキュメンタリーの違い

	広報ビデオ	ドキュメンタリー
事前の企画	○	◎
撮影台本	◎	△
カメラ撮影	◎	◎
映像編集(構成)	○	◎
ナレーション	○	◎
教育効果(短期)	大きい	少ない
教育効果(長期)	やや大きい	大きい

広報ビデオは短期決戦なので、全ての項目が重要だが、企画や編集、ナレーションは、一般的な制作能力があれば対応できる。一方、ドキュメンタリーでは撮影台本は「それほど重要ではない」が、他の項目は全て「重要」になる。教育効果については、広報ビデオは短期的な教育では有効であり、ドキュメンタリーは長期的な教育で有効だと言える。

8. まとめ

本稿では介助犬ビデオを中心に、豊田市旭地区の広報PRビデオの制作過程も含めて報告した上で、優れた映像コンテンツを制作するための課題などを考察した。今回の広報ビデオ制作は、大学・研究室が地域連携・社会貢献の実践研究モデルとして制作したものである。大学側がボランティアで制作費をかけずに作ったことから、制作を依頼した団体側は、それほどクオリティの高い作品を期待していなかったかもしれない。しかしながら広報ビデオは見る人の立場で考えると、制作者が大学・学生でも、テレビ局でも、映像制作会社でも、作品内容とは全く関係ない。映像作品から何が伝わるのか、それを見た人は何を思い、何を感じるのか、ということが映像コンテンツの役割でもあり使命でもある。したがって今回のような大学と地域・団体とがコラボで制作した広報PRビ

デオは、制作過程の様々な連携・協力によるメリットはあるものの、最終的には優れた映像作品を制作できたのか、という部分が最大の到達目標であり評価ポイントになる。もし完成作品のクオリティが低くて広報活動で使えない作品ならば、制作に向けた作業は全く意味のないものになってしまう。本当に厳しい世界である。今回の介助犬ビデオと旭ビデオの事例は、別の見方をすると大学・研究室ゼミにおける映像制作指導の現状や教育レベルを、本物の広報ビデオ制作で検証した結果とも言える。そうした意味では、常に第一線のテレビ制作現場で仕事に立ち向かうつもりで、学生の教育や研究・制作活動に取り組む姿勢が求められると実感した。

この研究は平成26年度椋山女学園研究助成(B)による研究成果の一部である。

参考文献等

- 1) 椋山女学園大学文化情報学部サイト
<http://www.ci.sugiyama-u.ac.jp/index.html>
- 2) 椋山女学園大学YouTubeサイト
<https://www.youtube.com/user/SugiyamaUniv>

とちくぼ・ゆうじ/文化情報学部教授
E-mail: tochikubo@sugiyama-u.ac.jp